

■本書の特色

- ① 古文の受験対策用テキストです。
- ② 入試問題でよくとりあげられる作品を選び、各講座ごとに作品別に実践演習ができるような単元構成になっています。
- ③ 大学入試を目ざす高校生が読んでおくべき文章を精選して、読解問題の題材にしています。
- ④ 各講座とも、**演習1**（基本演習）→**演習2**（実践演習）の流れで構成され、無理なく読解力をつけることができます。
- ⑤ 各講座に**（基本確認演習）**を設け、古文読解の基礎となる知識を確認できるようになっています。

目次

第1講座	徒然草	2
第2講座	枕草子	6
第3講座	宇治拾遺物語	10
第4講座	更級日記	14
第5講座	蜻蛉日記	18
第6講座	大和物語	22
第7講座	源氏物語(1)	26
第8講座	源氏物語(2)	30
第9講座	大鏡	34
第10講座	韻文	38



- 6 線部「行はるる」場所はどこか。
- I ( )  
II ( )
- 5 (I)には「あはれなり」、(II)には助動詞「き」を、それぞれ適する活用形に改めて答えよ。
- ① ( ) ② ( )
- 4 線部ハ「いたう」の①正しい活用形を書け。また、②このような発音・表記上の変化を何と言うか、記せ。
- ニ ( ) ホ ( )  
イ ( ) ロ ( )
- 3 線部イ・ロ・ニ・ホの品詞名を書け。
- 5 ( ) 6 ( )  
3 ( ) 4 ( )  
1 ( ) 2 ( )
- 2 線部1～6の文中での意味を書け。
- C ( ) D ( )

- 2 やうやう白くなりゆく山際、少しあかりて、
- 3 あさましきまで目を驚かせ給ふ。
- 4 朝日にほふ山桜花。
- 5 この酒をひとり食べんがさうざうしければ、
- ③ (文学史) 古典の三大随筆名と作者名を成立順に記せ。
- (3) ( ) (2) ( ) (1) ( )
- 古語では現在と語は似ているが意味の違うものに特に注意しよう。また、語意の選択にも注意しよう。そして、連語もおぼえよう。
- 成立年代やその随筆の特色なども知っておくことが大切である。

## 演習2 次の文章を読んで、あとの各問いに答えよ。

1 このごろの歌は、一ふしをかしく言ひかなへたりと見ゆるはあれど、古き歌どものやうに、いかにぞや、ことばの外に、あはれに、けしき覚ゆるはなし。貫之が「糸による物ならなく」と言へるは、古今集の中の歌くづとかや言ひ伝へたれど、今の世の人の詠みぬべきことがらとは見えず。その世の歌には、すがた・言葉、このたぐひのみ多し。この歌にかぎりてかく言ひたてられたるも知りがたし。源氏物語には、「物とはなしに」とぞ書ける。新古今には、「この松さへ峰にさびしき」といへる歌をぞ言ふなるは、まことに、少しくだけたるすがたにもや見ゆらん。( ) この歌も、衆議判の時、よろしきよし沙汰ありて、後にもことさらに感じ仰せ下されける由、家長が日記には書けり。歌の道のみ、いにしへに変はらぬなどいふ事もあれど、いさや。今も詠みあへる同じ詞・歌枕も、昔の人の詠めるは、さらに同じものにあらず。やすくすなほにして、姿もきよげに、あはれも深く見ゆ。

2 梁塵秘抄の郢曲の言葉こそ、また、あはれなることは多かめれ。昔の人は、ただいかに言ひすてたることくさも、皆いみじく聞こゆるにや。

〔語釈〕 糸による物ならなくに——古今集の歌「糸による物ならなくに別れ路の心細くも思ほゆるかな」(糸に繞るものではないのだが、別れ路は心細く思われるものだ)。「物とはなしに」とぞ書ける——「物ならなくに」を、「物とはなしに」と引用して書いてある。「この松さへ」——「冬の来て山もあらはに木の葉ふり残る松さへ峰にさびしき」の歌をさす。衆議判——この歌を新古今集に入れるかどうか、

和歌所で全員で歌の優劣を判定したこと。家長——当時の和歌所の次官源家長。郢曲——平安後期から鎌倉初期の詠い物の総称。

1 ——線部イ、「このごろ」とはいつか、次の中から選んで、適するものの符号を○で囲め。

ア 平安後期 イ 鎌倉初期 ウ 鎌倉後期

2 ——線部ロ、貫之が書いた日記を漢字で答えよ。

3 貫之以外の古今集の撰者名の読み方を現代仮名遣いで書け。

紀 友則 ( )

凡河内躬恒 ( )

壬生忠岑 ( )

4 ——線部ハ、新古今集撰集の院宣をくだしたのはだれか。

5 古今集から新古今集まで、①勅撰和歌集は何集あるか、また、②そのすべてを総称して何と呼ぶか。

① ( ) 集 ( )

② ( ) ( )

6 — 線部ニの、①読み方を答え、②編者・③成立時期をそれぞれ後のものから選んで、符号を○で囲め。

① ( )

②編者

ア 藤原公任      イ 後白河院      ウ 宗祇      エ 鴨長明

③成立時期

ア 平安後期      イ 鎌倉初期      ウ 鎌倉後期

7 — 線部1、「古き歌ども」にはどのようなよさがあると言うのか、簡明に述べよ。

( )

8 — 線部2の意味として適するものを選び、符号を○で囲め。

ア 最高の傑作      イ 人が使わない言葉で表現した作品

ウ 多くの人に使われている表現      エ 最も劣った作品

9 — 線部3、「その世」とはいつを言うか。

( )

10 — 線部4、「このたぐひ」とはどういうことを言うのか、簡明に記せ。

( )

11 — 線部5は何をさすか。

( )

12 — 線部6の上にはある語句を補うと意味がはっきりする。補うべき語句を、文中から四字または五字で示せ。

( )

13 文中の( )に適する語は次のどれか、適するものの符号を○で囲め。

ア かくて      イ されば      ウ されど      エ かつ

14 筆者はこの文章をとおして、どんなことが言いたかったのか、百字以内でまとめよ。


15 — 線部7、「歌枕」とはどういうものか。

( )

## 第2 講座 枕草子

典 出

**演習1** 第一八四段「しばしありて、前駆たかう追ふ声すれば…」  
**演習2** 第九九段「なにか。この歌よみ侍らじとなん……………」

**演習1** 次の文章を読んで、あとの各問いに答えよ。

しばしありて、前駆たかう追ふ声すれば、「殿まるらせ給ふなり」とて、散りたるものとりやりなどするに、いかでおりなむと思へど、(A)えふとも身じろかねば、いまま少し奥にひき入りて、さすがにゆかしきなめり、御凡帳のほころびよりはつかに見入れたり。

大納言殿のまゐり給へるなりけり。御直衣、指貫の紫の色、雪にはえていみじうをかし柱もとに給ひて、「昨日今日、物忌に侍りつれど、雪のいたく降り侍りつれば、おぼつかなきになむ」と申し給ふ。(B)と思ひつるに、いかで」とぞ御いらへある。うち笑ひ給ひて、「(C)ともや御覧ずるとて」などのたまふ。——中略——

宮は白き御衣どもに紅の唐綾をぞ上<sup>からあや</sup>にたてまつりたる。御髪のかからせ給へるなど、絵にかきたるをこそかかることは見しに、うつつにはまだ知らぬを、(D)の心地ぞする。

女房と物いひ、たはぶれごとなどし給ふ。御いらへを、いささか恥づかしとも思ひたらず聞こえ返し、そら言などのたまふは、あらがひ論じなど聞こゆるは、目もあやに、あさましきまであいなう、おもてぞあかむや。御くだ物まゐりなどとりはやして、御前にもまゐらせ給ふ。

〔語釈〕 前駆たかう追ふ——声高に先払いする。殿——中宮定子の父、藤原道隆。大納

言殿——道隆の子で中宮の兄の伊周。唐綾——中国渡来の綾織物。

1 ——線部1・4・6・7・8の主語(動作をするもの)は次のどれか、それぞれ符号で答えよ。

ア 殿 イ 大納言殿 ウ 女房 エ 中宮定子 オ 作者清少納言

### 基本確認演習

#### ●主語の把握

① 次の文の——線部の主語を答えよ。

御前に人々所もなくゐたるに、今のぼりたるは、少し遠き柱のもとにゐたるを、とく御覧じつけて、「こち」と仰せらるれば、道あけて、いと近う召し入れられたるこそうれしけれ。

1 ( ) 2 ( )  
 3 ( ) 4 ( )

●まず登場人物を整理しよう。「人々」(女房たち)しか書かれていないが、随筆や日記には作者がいることを忘れてはいけない。

次に、古文では敬語表現に注意したい。きわめて身分の高い人は名前が出てこないことが多い。最高敬語には特に注意。「枕草子」の地の文に最高敬語があれば、主語は中宮定子の場合が多い。「源氏物語」などでは、まず主語は天皇だと考えるとよい。

1 ( ) ( ) 4 ( ) ( ) 6 ( ) ( ) 7 ( ) ( ) 8 ( ) ( )

2 — 線部2と同じ用法の「いかで」は次のどれか、符号を○で囲め。

ア いかでかくはおぼしめしおぼせらるるぞ。 イ いかで月を見ではあらむ。

ウ いかで心なさけあらむ男にあひ得てしがな。 エ いかで、はた、かかりけむ。

3 — 線部3を、省略されている言葉を補って現代語訳せよ。

[ ( ) ]

4 — 線部5「かかること」とは何をさすか。

[ ( ) ]

5 (A) に適する語は次のどれか、適するものの符号を○で囲め。

ア いづくんぞ イ さらに ウ まさに エ いやしくも

6 (B)・(C) は、「山里は雪降りつみて道もなしけふ来む人をあはれとは見む」を踏まえたものである。Bに適する語句を四字で、Cに適する語を三字で記せ。

B ( ) C ( )

7 (D) に適する語を漢字一字で記せ。

( ) ( )

8 — 線部イ・ロ・ハ・ニの文中での意味を書け。

イ ( ) ロ ( )

ハ ( ) ニ ( )

◎係り結びの整理◎

② 次の二つの文を現代語訳せよ。

ア かの木は父の植ゑ給ひしか。

[ ( ) ]

イ かの木こそ父の植ゑ給ひしか。

[ ( ) ]

③ 次の各文の文末を正しい活用形に改めよ。

ア 名をばさかきの造となむいひけり。

イ いづれの山か天に近し。

ウ いつとても月はかくこそあり。

ア ( ) イ ( )

ウ ( )

◎文中に「ぞ・なむ・や・か」があると、文末の活用形は連体形。「こそ」があると、文末の活用形は已然形となる。

ただし、「この殿の御心、さばかりにこそ。」のように、結び「あれ」が省略されることもある。また、係助詞を受ける語(結びとなるはずの語)に接続助詞などがついて、結びの形をとらずに下に続いていくこともある(結びの消滅)。

**演習2** 次の文章を読んで、あとの各問いに答えよ。

「なにか。この歌よみ侍らじとなん思ひ侍るを。ものの折など、人のよみ侍らんにも、よめなど **A** ければ、えさぶらふまじき心地なんし(a)。いと **2** かがは、文字の数知らず、春は冬の歌、秋は梅の花の歌などをよむやうは侍らむ。されど、歌よむといはれし末々は、少し人よりまさりて、その折の歌はこれこそあり(b)。さはいへど、**3** それが子なればなどいはればこそ、かひある心地もし侍らめ。つゆとりわきたるかたもなく、さすがに歌がましう、われはと思へるさまに、最初によみ侍らん。亡き人のためにもいとほしう侍る」と、まめやかに **B** ば、わらはせ給ひて、「さらば、ただ心にまかせよ。我はよめとも言はじ」と **C** すれば、「いと心やすくなり侍りぬ。いまは、歌のこと思ひかけじ」などいひてあるころ、庚申かうしんさせ給ふとて、内うちの大殿だいだん、いみじう心まうけさせ給へり。

夜うちふくるほどに、題出して、女房にも歌よませ給ふ。みなけし5 きばみゆるがしに、宮の御前近くさぶらひて、もの啓しなど、こと事をのみいふを、大臣御覧じて、「など、歌はよまで、むげに離れるたる。題とれ」とて賜ふを、**6** 「さることうけたまはりて、歌よみ侍るまじうなりて侍れば、思ひかけ侍らず」と申す。**7** 「ことやうなる事。まことにさることやは侍る。などか、さはゆるさせ給ふ。いとあるまじきことなり。よし、ことは知らず、今宵はよめ」など責め給へど、**8** けぎよう聞き入れてさぶらふに、みな人々よみい出して、よしあしなどさだめらるるほどに、いささかなる御文を書きて、投げ賜はせたり。見れば、

元輔が後といはるる君しもや今宵の歌にはづれてはをる

とあるを見るに、をかしきことぞたくひなきや。いみじうわらへば、「なにごとぞ、なにごとぞ」と大臣も問ひ給ふ。

「その人の後といはれぬ身なりせば今宵の歌をまづぞよまし。つむことさぶらはずは、千の歌なりと、これよりなんいでまうで来まし」と **D** っ。

〔語釈〕 庚申——庚申かうしんの日の夜に寝ると、三戸さんしという悪い虫が人の体内に入って害をなすという俗信から、寝ずに夜を明かす行事。内の大殿——中宮の兄藤原伊周これちか。宮——中宮定子。

1 文中 **A** の **A**、**D** に適する語を次の中から選び、正しい活用形に改めて書け。

啓す 仰す 奏す 言ふ 宣ふ

**A** ( ) ( ) **B** ( ) ( )

**C** ( ) ( ) **D** ( ) ( )

2 文中の (a) には「侍り」、(b) には「けり」の活用形が入る。この文に適するように正しい活用形に改めて書け。

a ( ) ( ) b ( ) ( )

3 ——線部2は直接どこにかかっているか。

[ ]

4 ——線部3を具体的に述べている部分が文中にある。その部分

を抜き出して示せ。

5 ——— 線部6がさしている内容を、文中から抜き出して示せ。

6 ——— 線部9は、だれに「つつむことさぶらはずは」なのか、漢字一字か二字で書け。

7 ——— 線部1・7・8を現代語訳せよ。

8 ——— 線部4の意味として適するものの符号を○で囲め。  
ア すこしのとりえもなく。  
イ まったく褒めてくれる人もなく。

ウ 涙を浮かべても仕方がなく。

エ 露を分けて野山を訪れたこともなく。

9 ——— 線部5の意味として適するものの符号を○で囲め。

ア 得意そうに歌を作り出すのに、

イ 風流ぶって苦吟しているのに、

ウ 景色を見ようと体をのり出すのに、

エ 顔色を変えて肩を揺すって逃げ出すのに、

10 ——— 線部ア・イの「ば」の違いを説明せよ。

ア いはれば

イ 侍れば

11 作者清少納言の気持ち・態度として、本文の内容に合っているものは次のどれか、一つを選び符号を○で囲め。

ア 古歌や歌人の逸話を知らないので、歌は不得意だった。

イ 歌人の子であることを気づかない、歌が詠みづらかった。

ウ 歌人の子としていつも最初に歌を詠まされるのがつらかった。

エ 中宮に気が向いた時だけ歌を詠めばいいと言われて、人前では歌を詠まないことにした。

# 解答

## select Ⅲ 古文実践演習

### 第1講座 徒然草

p 255

#### 作品紹介

「徒然草」は鎌倉時代後期に成立した随筆文学で、作者は兼好法師である。序段を除き二百四十三段から成り、その中に四季の自然観照、日常的な処世訓、人生観、芸能談、趣味論など、さまざまなことが、無常観を根底にすえて述べられている。文章は流麗な擬古文や簡潔で明快な和漢混交文で書かれており、平安時代の「枕草子」、鎌倉時代初期の「方丈記」と並ぶ、古典の代表的随筆文学である。

#### 演習 1

1 A やりみず B のさき C くじ D ついな 2 1 少しも・ほとんど 2 興ざめする・おもしろくない 3 尊いことだ・恐れ多いことだ 4 準備・支度 5 おおげさだ・大仰だ 6 声高く言い騒ぐ・大声をあげて騒ぎ立てる 3 イ副詞 ロ形容詞 ニ名詞 ホ形容動詞 4 ①いたく ②ウ音便 5 I あはれなる II しか 6 宮中

#### 解説

1 古語の読み方は出て来た時々覚えていく。 2 古語辞典で確認しよう。 3 品詞は単語の持つ文法上の性質によって分けたものであるから、自立語か付属語か、主語になるか述語になるかなど、十品詞の性質をよく知ろう。 4 音便にはイ音便・ウ音便・撥音便・促音便がある。活用語の音便は主として連用形に見られるが、形容詞のイ音便は連体形、ラ変また、ラ変型助動詞・形容詞・形容動詞の撥音便は連体形に見られる。 5 係り結び法則を知ること。 6 公事（朝廷の政務や儀式）と「とり重ねて催し行はるる」のである。

#### 口語訳

さて、冬枯れの景色は、秋に少しも劣らないだろう。（庭の池の水辺の草に紅葉が散りとどまって、霜がたいそう白く置いている早朝、（庭に流れる）遣水から水蒸気が（白く）立ち上っているのは趣がある。年がすっかり暮れて、だれもが（新年の）準備をし合っているころは、この上

もなくしみじみとした情趣がある。興ざめなものとして見る人もいない（冬の）月が、寒々と澄みきっている二十日過ぎの空こそ、心細いものである。（宮中から）御仏名や荷前の勅使が発発するころなどは、しみじみと趣深く尊いものである。朝廷の諸儀式なども多く、それが新年の準備と重なって催し行われるようすは、すばらしいことである。（年末の）追儺の儀式から（新年の）四方拝の儀式へ続いていくのは、おもしろいものである。大晦日の夜、たいへん暗いときは、たいまつをいくつもともして、夜中過ぎまで、人の（家の）門をたたいて走り回って、何事なのであろうか、おおげさに大声をあげて騒いで、足も地につかないようすで走り回っていたのが、夜の明け方からは、さすがに静かになってしまふのは（過ぎ去った）一年の余情を感じもして心細いものである。（この大晦日は）死んだ人（の靈魂）がやって来る夜だといって、靈魂を祭る行事は、このごろでは行われないが、関東の方では、やはり行うことであつたのは、しみじみと感慨深いものであつた。

#### 基本確認演習

①のうし さしぬき えほし かたびら ぞうし なげし ついじ せんざい きちよう すびつ おおとなぶら（おおとのあぶら） たかつき かんだちめ てんじようびと ころうど とねり ②1 長年の間 2 だんだんと 3 驚きあきれ 4 美しく照り映える 5 何となくもの足りない ③(1)枕草子・清少納言 (2)方丈記・鴨長明 (3)徒然草・兼好法師

#### 演習 2

1 ウ 2 土佐日記 3 きのものり おおしこうちのみつね みぶ のただみね 4 後鳥羽上皇 5 ①八集 ②八代集 6 ①りょうじんひしよう ②イ ③ア 7 古き歌どもには、言外にしみじみした余情があると言っている。 8 エ 9 古今集の時代・平安時代中期 10 貫之の「糸による」の歌と似た歌。 11 歌くづ 12 歌くづと・歌くづとか 13 ウ 14 和歌の道だけは昔と変わりないというが、今の和歌には余情が乏しい。昔の和歌は歌くづといわれるものでも、みなすぐれているし、格調が高い。昔のものはみなすばらしく思える。（八十二字） 15 歌の中に古来詠みこまれ、親しまれた歌材。名所・旧跡。

#### 解説

1 作者の時代ということである。作品紹介を参照しよう。 2 紀貫之（あつた）といったら、すぐ「古今集」の撰者、「土佐日記」の作者と思ひ浮かべる。

3 この三人の読み方は古文の常識である。4 「新古今集」は建仁元年（一一〇一）に後鳥羽上皇の院宣によって、源道具・藤原有家・藤原定家・藤原家隆・藤原雅経・寂蓮（途中没）の六人を撰者として作られたものである。5 古今和歌集・後撰和歌集・拾遺和歌集・後拾遺和歌集・金葉和歌集・詞花和歌集・千載和歌集・新古今和歌集の八勅撰和歌集を八代集という。また、はじめの三和歌集を三代集という。6 「梁塵秘抄」は今様を中心とした平安時代の歌謡を集めたものである。室町時代の小歌を集めた「閑吟集」とともに知っておこう。7 「ことばの外に、あはれに、けしき覚ゆ」と言っている。8 「古今集の中の……」ど、今の世の……見えず。」と、逆接の「ど」があることと、「この歌にかぎりてかく言ひたてられたるも知りがたし」で知ろう。9・10・11 指示語はまず直前の文から探し、次いでその前の文とたどっていつてつかむ。9の「その世」は「このころ」に対応するもの、つまり「古き歌ども」の世である。「古今集の時代」とするとよい。12 「のこる松さへ」の歌をよいと言いか、悪いとするのか、文脈の流れからそれをつかみ、よしあしの文中での語をつかむ。「歌くづ」と仮名で書くときは、文中の語で応えるのだから「ず」と改めてはいけない。13 接統詞の空欄補充は、接統詞の種類（順接・逆接・並列・選択・話題の転換など）と前後の文の関係を考える。ここは逆接。14 要旨の把握である。全文を読み通して、ポイントをつかもう。15 歌に関する知識の一つとして知っておこう。

【口語訳】近ごろの歌は、一カ所ぐらいいは趣深くうまく表現していると思われるものはあるが、古い数々の歌のように、どうしてだろうか、言外に、しみじみと心をうつ、情趣を感じるものはない。紀貫之が「糸によるものではないのに」と詠んだ歌は、「古今集」の中のものもつとも劣つたものだと言いつて伝えているが、今の世の人が詠むことができることは遣いとも思われぬ。その当時の歌には、歌の格調でも用語でも、この歌に似たものが多い。（それなのに）この歌に限って歌くずと取りあげられているのも、その理由を（理解しがたい。「源氏物語」には「物ならなくに」を）「物とはなしに」と書いてある。「新古今集」には、「あとに残された松さへ峰に寂しく立つてゐることだよ」と歌っている歌を（歌くずだと）言っているということだ

が、なるほど、少し調子が整わない形に見えるのであろう。けれども、この歌も、衆議判の時には、かなりよいという判定があつて、その後でも、（後鳥羽院が）特別に感心なさつて（おほめの）お言葉を下されたということが、源家長の日記に書いてある。

和歌の道だけは、昔と変わらないなどということもあるが、さあどうであらうか。今も（歌人たちが）詠みあつている（昔と）同じ用語や歌枕も昔の人の詠んでいるものは、（今の人の詠んでいるものと）決して同じものではない。（昔の人の詠んだものは）平易で率直であり、歌の姿も美しく、しみじみとした趣も深く思える。

「梁塵秘抄」の郢曲の言葉は、これまた、しみじみとした趣の深いものが多いようである。昔の人（の歌のことは）は、何ということもなくどんなに何げなくいった言葉でも、すべてすばらしく聞こえるのであろうか。

## 第2講 講座

### 枕草子

p 659

#### 作品介绍

「枕草子」は平安時代中期に成立した随筆文学で、作者は「後撰和歌集」の撰者の一人である清原元輔の女、清少納言である。長短さまざまの文章から成る約三百段の内容は、随想的なもの、「……は」「……もの」で始まるいわゆる物づくし、日記的回想のもの、三つに大別できる。一条天皇の中宮定子に仕えた約十年にわたる宮廷生活の体験や、自然・人事に関することが、繊細な観察力・豊かな感覚・鋭い才気を通してとらえられ、描かれている。

#### 演習 1

1 1ウ 4エ 6ウ 7イ 8オ 2ウ 3気がかりですので参上  
しました。 4中宮様の美しくすばらしいお姿。 5イ 6B道もなし C

あはれ 7夢 8イ見たい 口お召しになる へめしあがる ニさしあげる

【解説】 1まず登場人物をつかみ、場面を知り、敬語の有無を見て判断する。登場人物に「殿」は入っていない。また、作者は名が出ていないことに注意。「御覧する」「のたまふ」は尊敬語、「聞こえ」は謙讓語である。 2「い

かで」には①疑問を表す、②反語を表す、③願望を表すの意味がある。——線部2は③として使われている。選択肢のアは①、イは②、ウが③、エは

①である。 3 「おぼつかなし」は、気がかりだの意。省略語は「参りぬ」

である。 4 前の文「宮は白き……かからせ給へるなど」の内容をさしている。 5 副詞の意味と呼応である。選択肢のAは反語の副詞、ウは、さしあたって・確かに・どうして・きつとの意を表す副詞、エは、かりにもの意である。 6 歌意がわかればつかめよう。山里には雪が降り積もって道もないことだ。そんな私の所を、今日訪れて来るような人をいとしい人と思おう。 7 上に「うつつ」とある。これに対応する語は「夢」である。

8 基本古語の意味である。辞典で確認しよう。

【口語訳】 しばらくして、高い先払いの音がすると、「関白様（道隆）が参上なさるようです」といって、散らかしてあった物を取りかたづけなどするので、（私は）何とかして（局へ）下がってしまいたいと思うけれども、まったく急には身動きもできないので、もう少し奥に身を引き込んだが、何といってもやはり見たいのだろう、御几帳の切れ目の所から少しばかりのぞき込んだ。

（関白様でなく）大納言様が参上なさったのだった。御直衣や指貫の紫色が、雪に映えてたいそう美しい。柱のもとにお座りになって、「昨日今日は、物思みでございましたが、雪がひどく降りましたので、（こちらが）気にかかりまして（参上しました）」と申し上げなされる。「雪が降り積もって」道もないと思いましたが、どうして」と（中宮様の）御返事がある。（大納言様は）にっこりなされて、「（私のことを）いとしいとお思いになるかと思ひまして」などとおっしゃる。|| 中略 ||

中宮様は何枚もの白い柱に、紅の唐綾の上着を着ていらっしやる。その所に御髪がかかっていらっしやるようすなど、絵に書いたものではないかという事は見たが、現実としてはまだ知らないで、夢のような気持ちがある。

（大納言様は）女房と話をし、冗談などをおっしゃる。（女房たちは）御返事を、少しも恥ずかしいと思わずに申し上げ返し、（大納言様が）嘘などおっしゃるときには、否定して是非を言い争い申し上げるようすは、目にもまぶしく、驚きあきれるほど、ただもう、顔が赤らむことだよ。（大納言様は）お菓子をめしあがるなどして座をとりもち、中宮様にもさしあげ

なさる。

【基本確認演習】 ① 1 作者 2 中宮定子 3 人々（女房たち） 4 作者 ② A

あの木は父がお植えになったのか。 I あの木は父がお植えになったのだ。

（係り結びの有無はこども違ふことを知る） ③ A ける I 近き U あれ

演習 2 1 A 仰せ B 啓すれ C 宣は D 啓し 2 a 侍る b けれ 3 よむ

やうは侍らむ 4 元輪が後 5（さらば）ただ心にまかせよ。我はよめとも

言はじ。 6 父・元輔 7 I お仕えできそうもない気持ち。 7 妙なことだ

なあ。 8 きれいさっぱり聞き入れないで（中宮様のお傍に）控えている。

8 A 9 I 10 A は受身の助動詞「る」の未然形「れ」についての「ば」で、

順接仮定条件を示し、I は動詞「侍り」の已然形「侍れ」についての「ば」で、

順接確定条件を示す。 11 I

【解説】 1 敬語動詞の意味を知るとともに、「啓す」「奏す」が絶対敬語ということを知る。「奏す」は天皇にしか使わない。次に□の下の語の接続を

考える。「ば」は未然形か已然形である。 2 a の上には「なん」があり、

b の上には「こそ」があることを知る。 3 反語の副詞「いかか」に係助

詞「は」のついた語で、「どうして……しようか、いやしい」となる。 4

「それが子」↓あの子の子というのである。だれの子なのか。「といはるる

君」はつけてはいけない。「君」は「あなた」の意である。「後」が「子孫」

の意。 5 I 線部 6 を含んだ作者のことは全体をつかんで考える。歌を

詠まなくてもよいことになっていると言っている点に注目。 6 「つつむ

こと」の意を知り、この部分を含む作者のことは、特に歌意がわかればつ

かめよう。 7 I 「え……打消」の呼応と助動詞「まじ」の意味を知る。

7 「ことやう」の意味と体言止めを考えよう。 8 「けぎよう」「さぶらふ」

の意味を知る。 8 「つゆ……なし」は、少しも……ない。「とりわく」

は、他と比べて特にきわだっているの意。 9 「けしきばむ」は、気どる・

風流ぶる、「ゆるがしいだす」は、苦吟するの意。 10 未然形十ば・已然形十

ば、である。 11 最初と最後の会話文の内容がつかめれば理解できる。そ

こに作者の気持ちがある。

【口語訳】 「どうして（そんなことがございませう）。（私は）この歌を詠み

ますまいと思っておりますのに。何かの折など、人が（歌を）詠みますよ

うなときでも、(中宮様が私に)詠めなどとおっしゃるならば、とてもお仕えできそうもない気持ちになります。(しかし、私といたしまして)ほんとはどうしてまあ、(歌の)文字数を知らなかったり、春には冬の歌を、秋には梅の花の歌などを、詠むようなことはございませうか。けれども、歌人といわれた人の子孫は、少しは人よりすぐれていて、あのときの歌はこの歌がすぐれていた、何といっても、あの人の子どものなから(すぐれていて当然だ)、などと言われるならば、詠みがいのある気持ちもいたしましう。(でも、私のように)少しも人に比べてきわだった点もなく、それでもやはり歌らしく見せて、私こそはと思っているようです、最初に詠み出しますようなことは、亡くなった父のためにも気の毒でございませ。」と、まじめに(中宮様に)申し上げると、お笑いになって、「それは、ただもう(あなたの)思うとおりにしなさい。(これからは)私は詠めとも言いませうまい。」とおっしゃるので、「たいそう気楽になりました。もう歌のことは気にかけませんまい。」などと言って過ごしているころ、庚申の催しをなさるといので、(中宮様の御兄の)内大臣様が、たいそう趣向をこらしていらつしやうた。

夜がふけていくころに、(内大臣様は)題を出して、女房に歌をお詠ませになる。みなが氣どつて苦吟しているのに、(私だけは)中宮様のお傍に仕えていて、何かを申し上げるなど、ほかのことはばかり話しているのを、大臣がご覧になって、「どうして、歌は詠まないで、むやみに離れて座っているのか。(歌の)題を取りなさい。」と(題を)くださるのを、(私は)「(中宮様から)しかるべきお許しをいただきまして、歌を詠みませんでもよいようになっておりますので、(歌を詠むなどという)ことは、思いもいたしません。」と申し上げる。「妙なことだなあ。ほんとうにそんなことがございしましたか。どうして、そうお許しになるのですか。まったくんでもないことだ。まあいい、ほかの時は知らないが、今夜は詠みなさい。」などと催促なさるけれども、さっぱり聞き入れもしないで(中宮様のお傍に)控えていると、人々はみな(歌を)詠み出して、その歌のよしあしなどを(内大臣様が)判定なさるころに、(中宮様は)ちよつとしたお手紙をお書きになって、投げておよこしになった。見ると、

(歌人)元輔の子ともといわれるあなたが、今夜の歌の遊びから外れて

いるのですね。

と(書いて)あるのを見るにつけても、おもしろいことはこの上もないことだよ。(私が)ひどく笑うと、「何事か。」と、大臣もお訪ねになる。

「あの(有名な歌)人の子といわれない私でしたならば、今夜の歌をまっ先に詠んだことでしように。(父元輔に)遠慮することがございせんならば、千の歌でも、私の方から詠んで差し出しましょうに。」と(中宮様に)申し上げた。

### 第3 講座

## 宇治拾遺物語

p 105 13

### 作品紹介

「宇治拾遺物語」は鎌倉時代初期の説話集で、百九十七話の説話を十五巻に収めているが、そのうち八十余話は平安時代後期に成立した説話集「今昔物語集」と同じ内容である。編者は未詳。内容は仏教に関する説話のほか、滑稽談・民話的説話も多く、当時の社会や庶民の生活が見られる作品である。

### 演習 1

② A霜 B答 5イ 6ヤ行上二段活用

4 ①白髪

【解説】 1 「なにが・だれが」に当たるものが主語。「なんだ・どんなだ・どうする」が述語である。 2 3の「事つく」は、かこつける・口実にするの意。 3 「つかまつれ」は大隅守が自分を上位において、郡司の動作に謙

譲表現を用いて、その動作を受ける自分を敬う形となった敬語表現で、尊大表現という。身分の差がはっきりしている場合の会話文に見られるので知っておこう。「参れ・奉れ・仕まつれ・申せ」など謙譲語の命令形が用いられる。ここの「つかまつれ」は「作る」の謙譲語である。 4 ①比較であるが、「頭の雪」といったら、すぐに白髪を思おう。 ②「霜と」「答」

の掛詞をつかむ。 5 大隅守の人情・慈悲心ととりたいたろうが、主題は歌に免じて罪を許されたということであるから、歌を詠む、つまり風流心が大切だと、主題にそって把握する。 6 ア行に活用する語は「得・心得」

の二語だけと知ろう。